第十五回 令和六（二〇二四）年度

神石高原町読書感想文コンクール

— 優秀作品集・総評 —

神 石 高 原 町
神石高原町教育委員会

神石高原町シルトピア
カレッジ図書館

もくじ

《小学生三・四年生の部・最優秀賞》

ストローの作り方で世界が変わる

油木小学校三年生 柳原 美波……………1

《小学生三・四年生の部・優秀賞》

ありがとうおばあちゃん

豊松小学校三年生 楠見 柑愛……………3

《小学生五・六年生の部・最優秀賞》

忘れてはいけない出来事

豊松小学校五年生 楠見 芽唯……………5

《小学生五・六年生の部・優秀賞》

幸せに生きることとは

三和小学校六年生 豊田 笑幸……………7

《中学生の部・最優秀賞》

勉強という道具を使って

神石高原中学校三年生 小田 陽……………9

《中学生の部・優秀賞》

遺されたものの幸せ

三和中学校三年生 河合 美佳……………11

《 高校生・一般の部・最優秀賞 》

「あと少し、もう少し」を読んで

油木高等学校一年生 村上 彩実……14

《 高校生・一般の部・優秀賞 》

「さみしい夜にはペンを持て」を読んで

油木高等学校一年生 高橋 青生……16

《 「黒い雨」の部・最優秀賞 》

私たちにできること

神石高原中学校三年生 神崎 芽生……19

令和六（二〇二四）年度 神石高原町読書感想文コンクール総評

審査委員長 山元隆春（広島大学大学院 教授）…21

《三・四年生の部・最優秀賞》

ストローの作り方で世界がかわる

油木小学校・三年生 やなぎはら 柳原 みなみ 美波

『さようならプラスチック・ストロー』という題名を見て、私は、毎日のようにストローを使って牛にゆうをのんでいるので、ストローが作られなくなると大へんだなと思いました。

世界さいしよのストローは、五千年前、シュメール人がビールをのむために使っていたそうです。それから、どんどん進化していきました。まずは、えんぴつに紙をまきつけて、紙のストローがたん生しました。次に、のみやすいようにネジを使って、曲がるストローが作られました。曲がるストローを作って、いいことが一つありました。それは、かんじやさんがねたままでも、のみものをのめることです。

次に、できたのは、プラスチック・ストローです。紙のストローだとぬれるとはがれて、ばらばらになつてしまうことがあるからです。しかし、プラスチックせい品は、小さくしてもいつまでもなくならない。そして、ポイすてされたプラスチックゴミが海の生き物をくるしませていることを知りました。

私は、この海の様子を見て、もうプラスチックせい品を作らないようにしたら、海の生き物も安心してくらすことができるのかなと思いました。私と同じ考えをした、九才の男の子が「ストローをなくそう」というキャンペーンを始めました。大人の人に言われなくても、自分から海のかんきようを考えて、言い出した、ゆう気がすごいなと思いました。私も、この男の子のように、気づいた事を、友だちや家族など、人に話したり、みぢかな事から行動にうつしたりしていきたいです。

でも、ストローがないとこまる人もいます。私のいとこは、小さいのでストローを使つてのんでいるのを見ます。また、おき上がれないときやコップを手でもてない人には、ストローがひつようになります。

しかし、海の生き物も安心できる海にしなくてはいけません。そのために、ひつようないときはストローを使わず、ストローをひつようとしている人のためにのこしていきたいです。そして、ゴミを正しくすることで、海の生き物も

安心してくらせるようにしたいです。

この本を読む前は、プラスチック・ストーリーを何も考えずに使っていたけど、読んだ後は、やさしい物でもあるけれど、くるしめる物でもあることが分かりました。これからは、こまっっている人やかんきょうの事を考えて生活していきたいです。

＊ 「さようならプラスチック・ストーリー」

(デュー・ロミート・著／光村教育図書・刊)

《三・四年生の部・優秀賞》

ありがとうおばあちゃん

豊松小学校・三年生 楠見 柑愛 くすみ かんあ

わたしがこの本をえらんだ理由は、わたしもよく家ごととけんかをして、ごめんねとすなおに言えないことがあり、いっしょだなと思いいこの本をえらびました。

はなちゃんという主人公は、おばあちゃんにきらいと言ってしまいました。はなちゃんは、おばあちゃんにごめんねとなかなか言えません。しばらくしたある日、おばあちゃんがきゆうきゆう車でびよういんにはこばれたのです。おばあちゃんが入いんしてだいぶんたつてから、お母さんは言いました。

「おばあちゃんは、前とずいぶんかわってしまって、お話もうまくできないのはなの顔を見たらきつとよろこぶと思うんだけどな。」

はなは、けっしんして、おばあちゃんに会いに行くことにしました。行くところうに（ごめんね。）と頭の中で何度もくりかえしました。

ひさしぶりに会ったおばあちゃんは、べつの人のように見えました。はなちゃんは何度も大きく息をすってゆっくりと思いきって

「おばあちゃん：おばあちゃんきらいって言ってごめんね。」
とすることができました。

わたしがこの本を読んで心にのこったところは、入いん中のおばあちゃんに会いに行ったときにはなちゃんが、

「おばあちゃん、わたしがわかる。」

と聞くと、おばあちゃんはしばらくじつとはなちゃんを見つめてからゆっくり「わたしのだいじなまじ。」

と言ったところでした。おばあちゃんがおぼえていたこと、ずつとかわいがつてもらってきたこと、ずつとだいにされてきた思いが伝わり、あふれてきました。はなちゃんは、今言わなきゃとやつと声に出して、

「ごめんね。」

とおばあちゃんに伝えました。

おばあちゃんが、はなちゃんのことをすごく大切に思っていることが伝わっ

てきました。はなちゃんも大すきなおばあちゃんにきらいと言ってしまったことをこうかいしているだろうと思いました。

わたしも本当は、そんなこと言いたくなかったのに、つい言ってしまうことがあります。かんたんに言葉にしてしまうけど、言われた相手はききづついたり、いやな思いをしているかもしれない。あやまりたいけれど、なかなか言葉にできなくて伝えられない時があります。言っただけでいいから、言う前に相手の気持ちを考えて言葉にできるようにしていきたいと思いました。

わたしも、おばあちゃんにありがとうの気持ちを伝えたいです。

＊ 「ごめんねでてこい」(ささきみお・著／文研出版・刊)

《五・六年生の部・最優秀賞》

忘れてはいけない出来事

豊松小学校・五年生 楠見 芽唯くすみ めい

私がこの本を選んだ理由は、表紙を見て、『いつかの約束 1945』と、本の題名の「1945」の意味が気になったからです。

この本の登場人物は、三人の女の子で「みく」と「ゆきな」と「すず」です。すずの見た目はおばあちゃんだけど、中身は九歳の女の子です。みくとゆきは泣いているすずと出会い、すずがおばあちゃんを入れ替わってしまったと考えます。かわいそうなすずを元に戻そうと、街のあちこちに一緒に行きます。すずは、移動している途中に、どれも見たことないように驚いたり、質問したりしていました。飛行機が通った時は、頭を守るように座り込んでしまいました。

私がこの本を読んで心に残ったところは、すずが、飛行機を見て頭を抱えて座り込み、こきざみにふるえていたところと、

「飛行機、爆弾を積んでいるんだよね？」

と言ったところです。初めは、なんで爆弾なんだろうと思いました。最後まで読むとその意味が分かりました。戦争を経験したすずにとって、飛行機は、爆弾が落ちてくるものなのです。怖いものであり、かくれなくてはなりません。飛行機を見るたびにおびえ、怖い思いを経験してきたんだなと思いました。

もう一つ心に残ったところは、みくとゆきなが戦争の話をした時に、すずが苦しそうにまゆをよせ右腕をおさえたところです。すずの右腕には、息をのむようなひどい火傷の痕があり、戦争の話を聞いて急に痛くなったのです。

何十年も前の出来事でも、その時の記憶や痛みが思い出されたりするのかもしれない。傷が治った後でも、心に残った傷は消えないのだと感じました。

私はこの本を読んで、戦争での経験は、決して忘れることはできない悲しい出来事だと思いました。だからこそ、二度と戦争は起きて欲しくないと思います。

一九四五年は、日本に原子爆弾が投下された年です。七十九年経つ今も、戦争について学習しています。それは、私たちにとって忘れてはならない出来事であり、伝えていくべき出来事だからです。

私は、平和学習で原爆の恐ろしさを改めて感じました。自分は体験していません

んが、体験された方の事を考えると悲しい気持ちになります。原爆の体験をされた方が報われるように、この事実を忘れず、生活していききたいです。そして、戦争が起きないように、もつと外国の事を知り、外国の方と積極的にコミュニケーションをとり、仲良くしたいと思います。

＊ 「いつかの約束 1945」(山本悦子・著／岩崎書店・刊)

《五・六年生の部・優秀賞》

幸せに生きることは

三和小学校・六年生 豊田とよた 笑幸にこ

「生きてこそ光り輝く」という言葉が、図書館で本をさがしていた時、目にとまった。私もこの言葉と同じ思いだと思い、本をひらくと、私の想像以上に、はるかに過酷な人生で、しようげきをうけた。

石橋幸緒さんは、幼少のころから難病をわずらい、三度にわたる大手術を行い十一さいまで入退院を繰り返した。腸閉そくを起こしていたことから水を飲んでも、すぐ吐き出してしまう状態だった。医者からは、母に三日もつかどうか分からないとも言われた状態だった。そんな中、幸緒さんは、しんどいことや辛いことも大いにあっただが、本の中では母への感謝の気持ちや、未じゆく児で保育器に入っていて黄疸がひどかったときにまるで大きめのマヨネーズだと思っただことなどおもしろくじょう談が書かれており、前向きなことばかりだ。

私の兄も早産で、未じゆく児で産まれてきた。毎年正月には、兄の出産の時の話になるのが、わが家のお決まりだ。新年早々きゆうな陣痛が始まり、夜中、雪をいっぱいかぶった車で、いそいで病院に向かった話である。私はその話を聞くと命の大切さをじっかんする。もし、私が産まれた時から病院生活がつづいていたら幸緒さんみたいに前向きで、強く生きられていただろうか。兄は、二、三カ月で、退院したが、そのままもしも病院でしばらく生活することになっていたら幸緒さんのようにたえられていただろうかと思う。本の中でもなん度もできしたが、母の辛抱強さや前向きさ、いつも明るく笑顔で支えた周りの環境も大きかったはずだ。

幸緒さんの言葉で、「普通」とは何かという疑問がでてくる。幸緒さんは、生まれたのは病院、育ったのも病院。人は、「かわいそうね」と言うけれど、生まれてからずっと病院の生活だった幸緒さんにとっては、そんなことを言われても病院以外のあたり前の生活なんてしらないし、むしろ不思議だったと言う。確かにあたり前とは何を基準にしているか分からないし、なにが正解なんだろうか。人によって生活スタイルはさまざまで、それより人生につかれて大切な自分の命をおとしていくほうがかわいそうだ。幸緒さんのようにどんなに辛いこと

があっても、精一杯生きていつも前だけ向いている生活をしたほうが幸せだと思う。

私もしよう来りたい夢を持っている。幸緒さんのように強くがんばれるか分からないが、たびたびくるしいことや辛いことがあってものりこえていきたいと思えた、そんな一冊だった。

＊ 「生きてこそ光り輝く 19歳、養護学校から女流王将へ」

(石橋幸緒・著／PHP研究所・刊)

《 中学生の部・最優秀賞 》
勉強という道具を使って

神石高原中学校・三年生

小田 陽 おだ みなみ

私はよく、瀬尾まいこさんの本を読んでいる。ある日ふと、他の人の作品も読んで新しい視点を見つけたと思った。早速図書館へ行き、司書の先生に相談してみると、喜多川泰さんの本を薦めてくださった。色々な本がある中で、「私の受験勉強を変えた十通の手紙」がパツと目に飛び込んできた。受験生である私は、何か自分と重なる部分があるかもしれないと興味を持ち、本を借りた。本を開いてみると、今の私に似た気持ちの主人公がいた。その気持ちわかる！なんて共感しながら読み進めた。

高校二年生の和花は、高校卒業後の進路について悩んでいた。大学に行くのか就職するのか。将来やりたいことが決まっていなくてどうしていいかわからなかった。兄の喜太郎の家へ遊びに行った時、兄が自分の人生を変えてくれた「手紙屋」を紹介してくれた。

兄が手紙屋と出会ったのは事故で両足が不自由になった時に偶然見つけた手紙屋の広告だった。広告には「はじめまして手紙屋です。まずは私に手紙をください。今悩んでいること、人生を素晴らしいものになりたい人、勇気をもって自分のことを手紙に書いて送ってほしい」と書いてあった。兄は手紙屋と十通の手紙のやり取りをした。

和花は、兄の人生をものすごい絶望から前向きな明るいものにした「手紙屋」とはどんな人なのか興味を持ち、兄が渡してくれた広告と、兄が一通目に受け取った手紙をじっくり読んでみた。

兄に届いた一通目の手紙には、自分では気づかないような視点からの言葉が書かれていた。

和花は自分も手紙屋から手紙がもらいたいと、いてもたってもいられなくなり、熱い思いをそのまま手紙に書いて送ってみた。手紙屋とは十通しかやり取りできないというルールがあるが、その十通のやり取りで勉強や人生について考えるきっかけを教えてもらった。例えば「勉強も一つの道具」という考えだ。勉強も物と同じで、上手な使い方ができれば人生になくってはならないものとし

て活用できる。そのために自分がどうするべきか考えてみて。と問いかけてくれた。

最後のやり取りの後、和花は、自分の人生は自分で作ろうという強い前向きな気持ちを持てた。

この本を読んで、和花と同じように心に響いた考え方がある。

まず、「一人でも多くの人に興味をもって生きるとは、自らの人生を素晴らしくすることにつながる」ということ。この本では数学自体に興味を持つことができなくても、それに関わる人に興味を持つことで、数学に対する興味も増えていくことが例として挙げられている。私もどちらかといえば数学が苦手に興味なんてあまりなかった。しかし、この本の通りに数学が得意な子の事を考えながら問題を解いてみた。あの子だったら先に約分してから計算していたな。など考えるうちに少し数学に興味が出てきて苦手意識がなくなり始めた気がした。苦手とは、実は自分が興味をもつことをあきらめ、苦手だと決めつけていただけなんだと気付いた。

そして、「勉強することは、今までこの地球上に存在した人々が経験し、発見しては次の世代へと伝えてきた素晴らしい知識や知恵を、今度は自分が受け継ぎ、自分のものにする事」ということ。勉強するとは、学んで自分のものにする事だけだと思っていた。しかし、自分のものにするだけではなく、受け継ぐことも大切だと分かった。先日地域の歴史や伝統を考える機会があった。先生に自分たちが住んでいる土地の名前の由来、伝統行事がなぜずっと続けられているのかを尋ねられたが、答えることができなかった。知っているようで実は知らなかった。受け継ぐことも自分のものにすることもできていなかった。知っている気分で満足していた自分が情けなくなった。もちろん自分の知識を増やすために勉強しなければならぬが、次の世代に受け継ぐためにも勉強は必要だと思った。

最後に「勉強という道具は、自分を磨くため。人の役に立つため。という二つの目的のために使ったときに初めて正しい使い方をしたといえる」ということ。医師や教師は、まさに勉強という道具を正しく使っていると思う。自分を磨いて学んだことを生かし、命を救ったり可能性を広げる手伝いをしたりしている。将来の自分のためだけしか考えていなかった私の胸に刺さった。私も勉強という道具を人のために使う仕事に就きたいと思った。

この先も勉強はまだ続く。目的を見失いそうになった時には、将来の自分やその時間関わっている人を想像し、自分の歩む道を思い描きたい。そして、自分と周りの人たちのために、限られた時間を大切に使い、勉強という道具を正しく使いたい。

＊ 「手紙屋」 蛍雪篇／私の受験を変えた十通の手紙」

（喜多川泰・著／株式会社デイスカヴァー・トゥエンティワン・刊）

《中学生の部・優秀賞》

遺されたものの幸せ

三和中学校三年生・河合 かわい 美佳 みか

「幸せになりなさい。」

あなたは大切な人を失ったことはあるだろうか。私は幼少期、よく世話をしてくれた祖父のことを思い出す。もう会うことが叶わないが、もし、私への言伝として思いを伝えるのなら何と言うのだろうか。そう思いながら読んでいた。

主人公の津田恵は死者からの言伝を伝えるため「ことづて屋」としていろいろな人に会う。私が一番印象に残っているのは「自分を幸せにするのも不幸にするのもあなた自身よ。自分自身の為に、幸せになりなさい。」母から娘への言葉。そして祖母から孫への言葉だ。「幸せになつて」ではなく「幸せになりなさい。」命令形で伝えた理由はもういない彼女しかわからないが私は娘と孫の幸せが彼女の幸せでもあつたのだと思う。幸せというのは自分だけの願いではなく、自分以外の誰かの願いでもある。まだ中学生だが死にたくなるようなことを何ども経験した。しかし私が死を望むのは私の幸せを願う人の幸せを奪うことになる。だから私は私の死を望まれても幸せを願ってくれる人、なにより私のために幸せになろうと思う。そう教えられた気がした。

そしてこの本を読んで学んだことがもう一つある。それは言葉にすることの大切さだ。この物語の死者は皆、生者に言えなかったことを伝えたい気持ちの強さのせいで津多恵は声が聞こえたら伝えるまでずっと頭にひびいている。残された人もまた津多恵に「死者に言葉を伝えられないのか」と聞く。だけれど津多恵は死者と意思をもって干渉できるわけではないから伝えてそれきりだ。そこから死んだら伝えることができない。今伝えないと次があるとは限らないということを思い出した。

過去となった思い出は思い出すたびおおきなものになつていく。それに比例して後悔も自分の重りとなつてどんどん重たくなつていく。その重りを引き摺つてばかりいるのではなく「今後の生き方」で感謝を主張したいと思う。悲しみに暮れているばかりでは亡き人々の願いが泡となってしまふ。彼ら、彼女らのためにも幸せになろう。そして今を生きる大切な人にも目を向け、また後悔しないように伝えることが大切だと思う。おじいちゃん。今まで本当にありがとう。最

後にそう思い幸せになる決意をした。

＊ 「ことづて屋」(濱野京子・著／ポプラ社・刊)

高校生・一般の部・最優秀賞」

『あと少し、もう少し』を読んで

油木高等学校・一年生 村上 彩実 むらかみ あみ

学校の図書館で見つけた本。読書感想文の本をどれにしようかと悩んでいる時に見つけた本。絵の具で描いたような絵、田舎のような田んぼと山、私が住んでいる地域の風景に似ていて親近感が湧き、読んでみることにしました。

この本は、新しく陸上部顧問になった上原先生と部長の榊井、いつも気弱で静かな部員の設楽と後輩の部員の俊介、不良の太田、バスケ部部长で頼みを断れないジロー、吹奏楽部でプライドが高い渡部の寄せ集めの中学生が駅伝の県大会出場を目指し、襷を繋いでいく物語です。各章が一人の走者に視点を当てて書いてあり、それぞれがあと少し、もう少しという気持ちを胸に一生懸命走る状況に感動する青春小説となっています。

テレビでも箱根駅伝などがよく放送されていて、私は興味がありません真剣に見たことがありますでした。今まで駅伝は、ただひたすら一位を目指して走っているだけだと思っていました。でも、この本からの区間を走っていてもみんなの思いを背負い、自分と闘いながら走っていて仲間との絆を強く感じられる競技だと駅伝への考えが変わりました。特に、それを感じられた場面があります。それは、最後の区間を榊井が走っている時で「おれの肩にある襷は重い」という文章です。榊井は、駅伝の少し前からタイムが落ちていてスポーツ貧血と診断され、思うように走れなくなっていました。しかし、どんなにしんどくても駅伝に走ることを辞めず、アンカーとして走りました。部長として誰よりも県大会に出場したいという強い思いやプレッシャーを感じていると思いました。

また、ジローの頼まれたら断れないという性格が自分と似ていると思いました。私は、今までこの性格が嫌いだったことをする時、楽しいと思っただけがなかったけどジローは嫌だと思っても明るく楽しく盛り上げて最後までやり遂げていました。なので、これからはこの性格を受け入れて自分も明るく楽しもうと思うことができました。

そして、私は、榊井のような人になりたいと思いました。榊井は駅伝を走る人数が足りない時に自分から色んな人に根気強く声をかけ人を集めていました。

私は、人にどう思われるか不安で進んで行動することが苦手なので行動力がすごいと思っただし、自分も少しずつ恐れず行動してみようと思いました。

この本を通して学んだことが二つあります。

一つ目は、経験をすれば人は成長することができるということです。上原先生は、最初は何も分かっていなかったけれど、段々と生徒の相談にのったりアドバイスをしていました。生徒も、みんなで練習を重ねていくうちに本音をぶつけられるような関係になり、そのうちに思いやりをもつて接することができるようになっていきました。結果は、県大会に出場することができましたが、それよりも経験を積むことが人間にとって一番成長できることだと私は思いました。

二つ目は、最後まで諦めないことの大切さです。人に抜かされたり、どれだけ差を広げられたりしても落ち着いて自分の走りを乱さず、ペースを調整しながら徐々に差を縮めていました。自分を信じ、努力したことが諦めず走ることに繋がったと思いました。

これからも、一緒にいてくれる仲間を大切にどんなことも諦めず様々なことに挑戦していこうと思いました。

* 「あと少し、もう少し」(瀬尾まいこ・著／新潮社・刊)

《 高校生・一般の部・優秀賞 》

『さみしい夜にはペンを持て』を読んで

油木高等学校・一年生 高橋 青生
たかはし はるき

ある日、読書感想文をなんの本で書くか迷っていたとき、友達から「これは青生君の好きそうな本で、とつても勉強になるし、「面白いよ」と言つて教えてもらった。その本は『さみしい夜にはペンを持て』という題名だった。私がこの本を読んだきっかけは、勧められたこと。絵柄が好みだったこと。なによりも「自分との人間関係」を築く本と帯に書かれていたからだ。なので、私は期待して本の1ページ目を開いた。

この本では、海の生き物達が人間のように生活しています。主人公は中学校の中で唯一のタコである「タコジロー」で、学校でいじめられていて、公園で落ちこんでいたときにヤドカリのおじさんと出会うことで物語が始まります。その後、ヤドカリのおじさんに学校でいじめられていることを話したタコジロー。ここから、タコジロー達にいろんな展開が巻き起こり、そこで人との接し方、日記を書く大切さや書き方についてヤドカリのおじさんに教えてもらうことになりました。次に、ヤドカリのおじさんが教えてくれたことの中で心に残った場面を2つ紹介します。

1 つ目は『思い』と『言う』には距離がある」です。この本の中では、ことばにならない思いのことを「コトバミマンの泡」、その泡を片付けるのを「コトバクラゲ」と呼んでいます。人は、思えば頭の中にコトバミマンの泡ができてそれをコトバクラゲが運び、口から言うことができます。しかし、コトバミマンの泡と口の距離は人の性格によって違ってきます。近ければ、順番は正確ではないが、すぐに話すことができる。逆に遠ければ、すぐに話すことはできないが、丁寧に話すことができる。私も、誰かに質問をされたときに言葉が詰まって、スラスラ言えないので、2つの距離が遠い方です。だから、今まで、考えて話すのが遅くなり、相手をイライラさせてしまうのではないかと思つてしまい、不安でいっぱいでした。しかし、この本を読んで、それは性格の問題だと知れたので私以外にも丁寧に答えようとする人がいるから気にする必要ないとわかりました。ただ、実際に話すのが遅くなってイライラしてしまう人はこの世界にいます。なので、

まずは自分とはどういう人間なのかをきちんと把握し、なにを質問されてもいように準備しておくことが大切だと理解しました。そのためにも、これから自分のことを把握するためのトレーニングをしようと思います。

2つ目は「ことばを決めるのが早すぎる」です。ここでは、中学校で習っている『走れメロス』（この物語では「泳げメロス」）を使って説明されています。例えば、走れメロスを読んでいるうちは、メロスが親友に身代わりになってくれと交渉する場面では、2人の友情に胸が熱くなったり、メロスが走っている場面では、残り時間にハラハラしてしまうなど、文のなかでいろんな感情を感じているはずだ。しかし、読書感想文で書くこうすると「感動しました」や「びっくりしました」という文章になりやすい。私もこの本を読むまではあまり意識せず「感動しました」などを使っていました。なので、文章や日記を書くときは、世界をスローモーションでよく観察してみて、自分が思ったことをメモしておくながら、豊かな表現で文章を書くことを意識しようと思った。

実際に私もタコジローのように同級生となかよくしたいけど、なかなかうまくいかなくて、その悩みを1人で抱え、落ちこんでいるときがあります。

そんなときに、日記を書いて、あのとときの自分について考えてみたり、自分に質問したりすることで私がどういう人間なのかを理解し、好きになれる。そんな魔法みたいなものがこの世界に存在していたんだと、この本を読んで私は思いました。

タコジローが私の性格と似ているところが多く、私が主人公になったつもりで楽しく読むことができました。もし、タコジローのような性格でなくとも、自分をもっと知るきっかけになる。周りをもっと見て表現することができるようになれます。私はこの本を全人類に勧めたいです。

＊ 「さみしい夜にはペンを持って」（古賀史健・著／ポプラ社・刊）

《「黒い雨」の部・最優秀賞》
私たちにできること

神石高原中学校三年生・神崎 芽生
かんざき めい

私はこの本を読んで、今の時代だからこそ戦争について、平和についてしっかりと向き合ってほしいと思いました。

私の学校は夏休みに入ると必ず八月六日の前に登校日を設け、講師の方をお招きして平和学習を行います。

私はそこで最近の平和学習は前と違って戦争経験者の方のお話を聞く機会が無くなったと感じています。私は戦争経験者の方のお話を直接聞くことで、当時の原爆の悲惨さや人々の気持ちをより深く感じる事が出来るのだと思っています。年月が経ち、当事者の方が減っていく傾向だからこそ、今の自分に出来る事はないのかと考えました。その為、私は資料を読んだりして理解を深めていこうと思いました。

そんな時、おすすめされたのが『黒い雨』でした。

まず、この本の作者は戦争経験者という事もあり、本の中では広島原爆投下当時の状況をリアルな心情を用いながら書かれていました。また、姪や被爆者への偏見を無くす為、主人公自身の日記や、姪の日記を清書する流れで物語は展開されていきました。

私は、この本を読み終わって、戦争の悍ましさや恐怖を感じました。なぜなら、回りくどい表現や間接的な表現が少なく、見たままのことが直接的に書かれていたからです。

例えば、「頭の髪があるべき部分がつるつるに禿げ、ねじり鉢巻をしていたと見える跡だけ皮膚が正常に残って」や「頬が大きく腫れすぎて巾着のようにならんと垂らして」といった実際に見ていない私達も想像が容易に出来てしまうほど具体的に書かれていました。

私が感じた悍ましさは実際に聞くよりも文字によって残されていることの方が印象に残り、怖さを表しているのだなと思いました。

この本を読むまでは「戦争」を自分は軽く見ていたのかもしれないと感じさせ

られました。戦争はもう終わっていて「過去」の出来事であると客観的に見るこ
としか出来ていませんでした。しかし、この本は主人公の視点で書かれているこ
とにより、より一層読者を物語に引き込もうとしていると感じました。だから私
は戦争が身近であり、過去の出来事ではないと気付くことが出来ました。実際、
今この時もどこかの国で戦争が起こっている事実は変わりません。私はこの本
で戦争は「命だけではなく人生をも奪う」のだとわかりました。

私は、幸せであるはずだった人生がたった一瞬で奪われ、当たり前だった日常
を変えてしまう戦争は絶対にあってはならないと思います。

戦争を防ぐために私たちに出来る事は、核兵器の恐ろしさについて理解する。
そして戦争経験者の方々のお話が聞けなくなっている今だからこそ、自分から
興味を持ち後世に伝えられるようにしっかりと学習していくことが大切だと思
います。この些細な行動でも意味があると思います。興味をもち、理解していく
ことが、未来が少しでもかわるために、私たちにできることだと思います。

* 「黒い雨」(井伏鱒二・著／新潮社・刊)

令和六（二〇二四）年度神石高原町読書感想文コンクール 総評

審査委員長 山 元 隆 春
（広島大学教授）

この四月に刊行されてベストセラーになった三宅香帆さんの『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』（集英社新書）のなかに次のような一節があります。

自分から遠く離れた文脈に触れること——それが読書なのである。
そして、本が読めない状況とは、新しい文脈をつくる余裕がない、ということだ。自分から離れたところにある文脈を、ノイズだと思ってしまう。そのノイズを頭に入れる余裕がない。自分に関係のあるものばかりを求めてしまう。（二三四ページ）

「ノイズ」とは「不要な音や情報、雑音」のことです。「読書」は「自分から離れたところにある文脈」を自分のなかに取り入れることだから「ノイズ性」が高い。だから、忙しくてそのような新しい「文脈」をつくる余裕がないと「ノイズ性」の高い「読書」は避けて、「自分に関係のあるもの」だけを求めるようになる、だから働いて忙しくなると「本が読めなくなる」というわけです。

今年も、神石高原町の小学校、中学校、高等学校で、熱心に取り組んでいただき、この読書感想文コンクールに多くの応募がありました。幅広いジャンル、領域の本が選ばれていました。応募された読書感想文のいずれもが、「読書」を「ノイズ」として切り捨てるのではなく、その「読書のノイズ性」を自分のうちに取り入れて、「他者の文脈に触れる」経験をしたことを、自分の言葉で語るものばかりです。

たくさんのお読者の応募作品のなかから、入選したものについて、短いものですが、選評を記しました。お読みいただければ幸いです。審査会で検討した作品はいずれも読みごたえがあつて、どの作品を入選とするか頭を悩ませましたが、それは審査委員一人ひとりにとってとても嬉しいことでもありました。そして、みなさんが送ってくださった作品から、読書には次のような働きがあることを知ることができました。

- ・ 読むことによって、自分の身のまわりの人との関わり方を新しくするきっかけになり、自分の身のまわりの世界に対する見方を変えることができる。
- ・ 読むことによって、日常で経験することと同じぐらいに大切な経験をすることができる。
- ・ 読むことによって、人と人をつなぐことができる。
- ・ 読むことによって、過去と現在と未来をつなぐことができる。

みなさんが手にした本は、自分にとって新しい情報を手に入れる「窓」にもなりますが、物語や小説の場合は、その語り手や登場人物に読者である自分を重ねることによって、自分を知る「鏡」にもなります。右に五つほどあげた読書の働きは、本がそのような「窓」や「鏡」であるからこそそうまれるものです。応募作品は、いずれも自分のやり方で、読んだ本を「窓」

や「鏡」にして、気づいたことや考えたことを言葉にしたものばかりでした。とても素敵なことだと思います。

冒頭で触れた三宅さんは「自分から遠く離れた文脈に触れること」が「読書」だと言っていました。そしてそのような新しい文脈に触れるだけの余裕がなくなると、本が読めなくなるのだと言っています。ですが、応募いただいた作品はいずれも「自分から遠く離れた文脈に触れること」を実践したもののばかりです。これは素晴らしいことです。これからも、人から薦められたり、自分で選んだりしながら、「自分から遠く離れた文脈」に出会い続けてください。その出会いを通して考えたこと、思ったことを言葉にして私たちに届けてください。

【小学校三・四年生の部】

《最優秀賞》

ストローの作り方で世界がかわる（油木小学校三年生 柳原美波）

ディー・ロミート著『さようならプラスチック・ストロー』（光村教育図書）

この感想文は、ディー・ロミート著『さようならプラスチック・ストロー』（光村教育図書）という、自分にとつても身近な「ストロー」を題材にした本を読んで書かれました。この本を読んで、自分と環境との関わり方について柳原さんが深く考えたことが伝わってきます。著者にとつて毎日給食の時間に牛乳を飲むために使うストローですが、この本には、五千年にシュメル人がビールを飲むためにはじめてストローを使ったことや、あるときから紙のストローができ、曲がるストローができて、やがてプラスチックのストローができたという歴史を知ることになります。プラスチックのストローは便利なのですが、紙製品と比べて、捨てられたあとに環境内に残り続けるため、とくに海洋生物たちを傷つけることになりやすい。自分と同じ九歳の男の子がこのことを知り「ストローをなくそう」キャンペーンを始めたことを知ってその男の子の勇氣に感銘を覚えたことも書かれています。その一方で、ストローがないと困る人もいることも柳原さんは視野に入れていて、実に柔軟です。人にとつて「やさしい物」でありながら、時に生き物を「くるしめる物」にもなるストローをどうするかという問題意識を持つことになった柳原さんの多面的なものの見方に感心しました。日頃使っているストローの歴史を知ることによって、自分を取り巻く環境や世界に対する自分の関わり方が「かわる」ということを伝えてくれているところが素晴らしい感想文です。読むことで「世界」は「かわる」のです。

《優秀賞》

ありがとうおばあちゃん（豊松小学校三年生 楠見柑愛）

この感想文は、ささきみお著『「めんねでてこい』（文研出版）のなかに出てくる「はなちゃん」と自分を強く関連づけて書かれています。この本のなかで「はなちゃん」は、あるとき自分の「おばあちゃん」に「きらい」と言ってしまう。そのことに「めんね」と言えないうちに「おばあちゃん」は病院に救急車で運ばれてしまいます。お母さんから言われてお見舞いに行くことになりました。久しぶりで「べつの人」のように見えた「おばあちゃん」に「おばあちゃん、わたしがわかる」と尋ねるとしばらく「はなちゃん」を見つめてからゆっくり「わたしのだいじなまご」と言います。そのことが「はなちゃん」の口から「めんね」という言葉を引き出すのですが、著者はこの部分に強く感動しました。「べつの人」のようになっても、「はなちゃん」のことをはっきりと覚えてそれを言葉に出してくれる「おばあちゃん」の強い愛情に強く惹かれたのだと思います。これは楠見さんが本のなかの登場人物を自分と関わらせながら読んでいるしるしです。だからこそ「はなちゃん」の心のなかも「おばあちゃん」の心のなかも、想像することができたのです。そのことによって、自分の「おばあちゃん」との新しい関わり方を楠見さんは思い浮かべて言葉にすることができま

した。夢中になって読んだ本が自分の身のまわりの人との関わり方を新しくするきっかけになるということを伝えてくれます。

【小学校五・六年生の部】

《最優秀賞》

忘れてはいけない出来事（豊松小学校五年生 楠見芽唯）

この感想文は、山本悦子作・平澤朋子絵『いつかの約束 1945』（岩崎書店）を読んで、平和を守るために私たちが忘れてはいけないことは何かということを書いた文章です。楠見さんがこの本を選んだのは、タイトルの「1945」の意味が気になったからです。この本では「みく」「ゆきな」という女の子が、自分は九歳だと言う「すず」という名の老婆に出会います。「すず」の言葉の端々に戦争の記憶と痛みがあらわれています。「すず」はその記憶と痛み、つまり、私たちが忘れてはいけない出来事を、「みく」と「ゆきな」に伝えていくためにこの本に登場しているのかもしれませんが。そうだとすれば、「みく」と「ゆきな」もまた、やがて年をとるわけですが、そのときに「すず」のなかの九歳の記憶と痛みを自分より年の若い人たちに伝えていく役割をもつことになります。それはこの本の読者も同じです。そのことを楠見さんは「私たちにとって忘れてはならない出来事」「伝えていくべき出来事」という自分の言葉でしっかりと捉えています。作者がタイトルに「1945」と書き、伝承の「語り部」的な存在と見ることもできる「すず」を登場させたことの意味をよく捉えている感想文です。悲しい出来事のもたらした痛みの記憶は、忘れてはいけないのだということを、楠見さんは伝えてくれます。痛みの記憶を注ぐ者と受ける者が登場する、ロイス・ローリー著『ギヴァー』（島津やよい訳、新評論）も「いつか」読んでみてください。

《優秀賞》

幸せに生きること（三和小学校六年生 豊田美幸）

この感想文は、石橋幸緒著『生きてこそ光り輝く 19歳、養護学校から女流王将へ』（PHP出版）というノンフィクション作品について書かれたものです。図書館で本を探していた時に「生きてこそ光り輝く」という本書のタイトルが目にとまったことが、豊田さんの感想文執筆の動機でした。幼い頃から難病を患い、過酷な生活を送りながら「女流王将」となった石橋さんの人生に、豊田さんは自分の家族のことを重ね自らの思いを語っています。豊田さんは石橋さんの本を読んで「普通」とは何かという問いをもつことになりました。これも、本の感想をもつ上で大切なことです。この本に書かれている、石橋幸緒さんの精一杯前向きに生きる姿に豊田さんが自分を重ねたことがよく伝わってきます。豊田さんは、この本を読みながら石橋さんの生き方に強く励まされ、「幸せに生きる」とはどのように生きるのかというイメージを描くことができたのではないのでしょうか。読むことが生き方に関わるのだということを教えてくれる感想文です。

【中学生の部】

《最優秀賞》

勉強という道具を使って（神石高原中学校三年生 小田 陽）

この感想文は、喜多川泰著『「手紙屋」 蛍雪編く私の受験を変えた十通の手紙』（スカパー・トウエンテイ）について書かれたものです。小田さんは、司書の先生に相談して教えてもらった喜多川泰さんの本のなかからこの本を選んだのですが、「私の受験を変えた十通の手紙」という副題に自分と重なる部分があるかもしれないと予想して、読み始めました。そこに今の自分に似た気持ちの主人公を、小田さんは発見しました。そこから「共感」に満ちた読書が展開されたのです。「勉強も物と同じで、上手な使い方ができれば人生になくってはならないものとして活用できる」「苦手とは、実は自分が興味をもつことをあきらめ、苦手だと決めつけていただけなんだと気付いた」というふうには、小田さんは自分がこの本を読んで発見したことを自分の言葉で語っています。「勉強」は何のためにやるのかという問いへの答えにたどりついているのです。喜多川さんの本を「窓」にして手に入れた学ぶことの意味を、小田さんはしっかりと言葉にして伝えてくれました。

《優秀賞》

遺されたものの幸せ（三和中学校三年生 河合美佳）

濱野京子著『ことづて屋』（ポプラ社）には「死者からの言伝」を伝えることのできる登場人物が登場します。この感想文は、この独特で不思議な設定にひきつけられ、考えたことを伝えようとしたものです。主人公「津多恵」がなかだちになって伝える、死者から「言伝」は、いずれも今生きている人を励まします。この、死者が生きている人をいかすという考え方には深いものがあります。この本のなかの「ことづて」は、生きている私たちの記憶のなかに生きている死者たち姿と言葉の比喩なのかもしれません。河合さんは『ことづて屋』という本のメッセージをきちんと受け取って、自分の「おじいちゃん」への思いを背景に、自分にしか語り出すことのできない言葉でその考え方を書いてくれました。そのところが、とてもすばらしいと思います。交通事故で死んだ女子高校生リズを主人公とした、ガブリエル・ゼヴィン著『天国からはじまる物語』（堀川志乃舞訳、理論社）を続けて読むと、河合さんが『ことづて屋』を読むことで気付いた生きることの意味を、もっと深めていくことができるとも思われます。

【高校生一般の部】

《最優秀賞》

「あと少し、もう少し」を読んで（油木高等学校一年生 村上彩実）

この感想文は、村上さんが学校図書館で見つけた、瀬尾まいこ著『あと少し、もう少し』（新潮社）について書かれたものです。村上さんははじめこの本の単行本表紙カバーにひき

つけられたとのこと（ちなみに新潮文庫版ではカバールの絵はまったく違うものになっています）、本の装丁もまた読書感想を引き出す大切な要素の一つになることを教えてくれる感想文でもあります（こうした要素のことを専門用語で「パラテキスト要素」と言うそうです）。中学校の陸上部が舞台になっていて、その陸上部が駅伝に参加することからドラマが始まります。村上さんが一人ひとりの登場人物の言動を細やかに捉えながらこの小説を読み進めたことがわかります。「おれの肩にある襷は重い」と言った「梶井」は陸上部の中心的存在で、村上さんがこの人物に理想的な自己を見ていることが伝わってきます。しかし、村上さんが自分に似ていると思ったのは「頼まれたら断れない」性格の「ジロー」です。「ジロー」に共感しながらも「梶井」になりたいと思う、読者としての村上さんの心の動きが伝わってくるようです。この感想文には後半でこの本に学んだことが丁寧に書かれています。村上さんの感想文そのものに大いに学ぶことがあります。それは、村上さんが体験したことがなくて、外側から見ただけだった「駅伝」という競技の本質を、この本を読むことでつかんでいるということです。日常で経験することと同じぐらいに大切な経験をするのが、読むことで可能になることを村上さんの感想文は教えてくれます。襷をつなぐという言葉は、駅伝以外でも、仲間を信じて諦めずに何事かを為そうとするときに使うことが少なくありません。駅伝は日本発祥と言われるスポーツ文化です。学校図書館でこの本の単行本表紙カバールの絵柄に村上さんが覚えた「親近感」は、この素敵な感想文のうまれる予兆だったのかもしれない。

《優秀賞》

「さみしい夜にはペンを持て」を読んで（油木高等学校一年生 高橋青生）

古賀史健著『さみしい夜にはペンを持て』（ポプラ社）を読んで高橋さんが書いたこの文章は、「読書感想文」を超えたものと言えるでしょう。最後の一文「私はこの本を全人類に薦めたいです」は、本としっかり関わり合った人でないと言えない言葉です。この本に出る「ヤドカリのおじさん」は大した人物で「タコジロー」君に、言葉の何たるかをととても具体的に伝えてくれます。読者は「タコジロー」君の脇に立って、「ヤドカリのおじさん」のそうした語りを「タコジロー」君のそれに対する反応も含めて立ち聞きするのです。この文章のなかにある「世界をスローモーションでよく観察してみても、自分が思ったことをメモしておくながら、豊かな表現で文章を書くことを意識しようと思った」という高橋さんの言葉は、「タコジロー」君と一緒に、いやそれ以上に「ヤドカリのおじさん」の話に高橋さんが夢中になったことをよくあらわしています。「感動しました」や「びっくりしました」という言葉は、そこでは必要ありません。そのことを発見したことが素晴らしいと思います。『さみしい夜にはペンを持て』は、吉野源三郎の『きみたちはどう生きるか』（岩波書店）を彷彿とさせるような本でもあります。フィクションなのに読者が「自分をもっと知るきっかけ」になる本だと、高橋さんはこの文章の最後のところで書いています。友達から教えてもらったこの本を「全人類に薦めたい」という言葉で結んでいるところも見事です。冒頭に

「読書感想文」を超えたものになっていると書いたのは、一冊の本で人と人をつなぐことができるということ、高橋さんのこの文章に教えられたからです。

【黒い雨の部】

《最優秀賞》

私たちにできること（神石高原中学校 三年生 神崎芽生）

この感想文のすぐれているところは、平和を維持するために「私たちにできること」はどういうことかということ、を誠実に掘り下げているところにあります。この感想文を書いた神崎さんは、井伏鱒二の「黒い雨」を読んで、今を生きる人たちが「今の時代だからこそ戦争について、平和についてしっかりと向き合ってほしい」という思いを強くしたと言っています。「黒い雨」について、「この本は主人公の視点で書かれていることにより、より一層読者を物語に引き込もうとしている」とも書いています。「黒い雨」の筆致をたどることによって、原爆の投下が人間の暮らしに何をもたらしたのかということ、自分ごとのように切実に感じているのです。戦争体験者の話を聞く機会が少なくなった自分たちが、戦争とは何かということを知ることがますます難しくなっていることを神崎さんは繰り返し述べています。戦争体験をもたない者は、戦争について書かれた本や文章を読んで、戦争によって何が起ったのかということを知るほかないのですが、読むことで知った考えることのもつ力をこの感想文は教えてくれます。結びに書かれている「興味をもち、理解していくこと」が「未来」を変えるために自分たちにできることだという言葉はとても大切です。読むことでそこにあらわれる人々の視点や経験を通して理解するということが、すべてはそこから始まる。「私たちにできること」はそのことを教えてくれるすぐれた感想文です。